様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００２６２

研究課題名（和文）マンガ－舞台芸術間のアダプテーション分析とその理論化

研究課題名（英文）Towards a Theory of Stage Adaptation of Manga

研究代表者
秦　美香子（Hata, Mikako）

花園大学・文学部・教授

研究者番号：９０５８５３５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、マンガの舞台化が盛んにおこなわれた時期を[1]1920年代～（萌芽期）、[2]1970年代～（展開期）、[3]2000年代～（発展期）に区分できるのではないかという仮説が得られた。このうち、とくに具体的な作品研究が可能であった発展期については、マンガから舞台への翻案過程について具体的な分析をおこなった。
また本研究を通して、（１）萌芽期や展開期のマンガの舞台化については基礎データが整理されていない、（２）各時期がどのように接合されるかをめぐる議論が不足している、（３）舞台表現を描いたマンガ作品の歴史がほぼまとめられていない、という今後の課題が浮上した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、主にテキスト分析の結果から、マンガから舞台への翻案過程に関して一定の知見を得ることができた。その成果として論じたことは、効果線やトーンワーク、コマ割りといった非言語的表現によって表現される登場人物の心理や場の雰囲気といったものが、ミュージカルでは音楽的要素によって翻案されている場合があること、プロットは維持されていても実は主題や登場人物の造型に重大な変更が行われている場合があることなどである。これらの研究成果は、新たなマンガ表現理論の構築に寄与するものとなる。

研究成果の概要（英文）：Through this study, a hypothesis is obtained: the period when manga were widely adapted to the stage can be divided into [1] the 1920s (embryonic period), [2] the 1970s (developing period), and [3] the 2000s (extensive period). Additionally, we conducted case studies of stage adaptations of manga, especially during the extensive period.
Moreover, the following issues have emerged as future tasks through the research: (1) basic data on the stage adaptation of manga in the first and the second periods have not been organized; (2) there is a lack of discussion on how the three periods are intertwined; and (3) the history of manga works depicting stage performance has not yet been explored.

研究分野：マンガ研究

キーワード：アダプテーション研究　マンガ研究　マンガ表現論　ミュージカル研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、マンガ的要素を取り入れた舞台表現が注目されている。マンガやゲームを原作とする「2.5 次元ミュージカル」と呼ばれる舞台ジャンルが有名であるが、それに限らず、国際プロジェクトとして制作され日本･韓国･台湾で上演された「Death Note the Musical」や、「ONE PIECE」（尾田栄一郎、集英社）などのマンガ作品の歌舞伎化のように、従来の舞台表現、伝統芸能においてもマンガのアダプテーションが成功をおさめた例が増えつつある。これらは、新しい日本型の演劇スタイルとして世界に発信する力をもっているとされている。マンガの舞台化という事象については、ファンダムの形成やメディアコンヴァージェンスなどの理論を用いて論じられているが、翻案されるテキスト自体の分析はいまだほとんど行われていない。マンガ－舞台間のアダプテーション事例を論じるための語彙が、マンガ研究、特にマンガ表現理論の中に十分に蓄積されているとはいいがたいからである。

従来のマンガ研究では、マンガ表現論は主に映画表現との比較検討を通じて構築されてきた。映画的なコマの連続性や視点がどのようにマンガ的表現に取り入れられてきたか、またそれを通じて「キャラ」がいかに成立していったかが精力的に考察されており、理論の精緻化が進んでいる。半面、それらの議論では、初期の少女マンガに演劇やバレエなど舞台芸術の要素が多く取り入れられていたことや、手塚治虫が映画的マンガ表現を作り出す際に、宝塚歌劇などの舞台表現に影響を受けた演劇的マンガ表現を検討していたことなどが十分に検討されてこなかった。このためマンガ－舞台間のアダプテーションを論じるための基礎研究が不足しているのである。この不足を補い、マンガ研究をより充実させるためにも、マンガの時間･空間･身体表現を舞台というアプローチから理論化することが求められている。

また、マンガ作品の歌舞伎化の例に明らかなように、マンガ－舞台間のアダプテーションは、ポピュラー文化／伝統文化（ハイカルチャー）の境界を越境する事象でもある。それらが海外で上演されることで、異文化間の越境も生じている。物語が翻案される際には、翻案先のコンテクストに合わせて作品のイデオロギーが変換されることが指摘されているが（ハッチオン　2012）、マンガ－舞台間のアダプテーションを分析することで、両表現に埋め込まれ自然化されていた科学主義、ジェンダー観や人種観等のイデオロギーをそれぞれ浮かび上がらせることができる。両表現のイデオロギーの違いを、文化的位相の転換という視点から問うことは、マンガ研究に限らずポピュラー文化研究全体にとって重要性を持つ。

以上の問題意識から、本研究では、舞台表現とマンガ表現の間で翻案が行われるとき、(1)時間･空間･身体がどのように再現され、または変換されるのか、(2)表現方法の変換によって、イデオロギーはどのように維持され、または変化するのか、を問いとした。

文献）ハッチオン、リンダ、2012『アダプテーションの理論』晃洋書房

2. 研究の目的

本研究は、上に示した2つの問いを検討することで、(1)近代的視覚表現としてのマンガの特徴を、舞台表現との比較から分析し、(2)マンガ表現に埋め込まれた科学主義、ジェンダー観や人種観等の文化政治を明らかにすること、これによってマンガ表現理論を更新･確立することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、マンガと舞台の時間･空間･身体表現を具体的に比較し、(1)翻案によって各表現はどのように再現され、または変換されるのか、(2)翻案の際にイデオロギーはどのように維持され、または変化するのか、を分析することとした。

4. 研究成果

【2019 年度】

2019 年度は、以下の研究を行った。まず、研究会を定期的に開催し、分析の視点や問題意識を共有するために、『ポーの一族』を用いたパイロット調査を研究代表者・研究分担者全員でおこなった。その結果は、2019 年 6 月 22 日、日本マンガ学会第 19 回大会において報告した（「マンガ－舞台間のアダプテーション―宝塚歌劇『ポーの一族』の事例から」秦美香子・西原麻里・増田のぞみ・山中千恵）。その他の事例研究としては、手塚作品の事例研究を通して、マンガ研究にとって舞台版と原作マンガの比較を行う意義について論じた。2019 年 11 月 30 日、中部人間学会第 19 回研究大会において報告した（「マンガによる時間表現――舞台へのアダプテーションを例に」秦美香子）。また、少女マンガ作品の「内面」表現の分析を行った。2019 年 11 月 30 日、中部人間学会第 19 回研究大会において報告した（「マンガ表現はいかに舞台化されるか――『トーマの心臓』のアダプテーション」西原麻里）。

さらに、ミュージカル作品の音楽監督などを務める大部胡知氏に研究会にご参加いただき、ミュージカル表現の特徴などについて尋ねた。またマンガ原作の舞台作品に出演された2名にインタビュー調査を行い、キャラクターを表現する際の工夫などについて尋ねた。

【2020年度】

主に高橋よしひろ「銀牙――流れ星　銀」について漫画と舞台を比較し、研究の方法に示した（1）については、人間が犬を演じなければならないという身体的な条件の下で、人間と犬の間で生じる絆という作品の焦点は必然的に変更を迫られざるをえないということを、関連資料の言説や出演者への聞き取り調査も参照しながら分析した。

また、とくに連載期間が長期に及ぶ場合に、本筋から少し離れたエピソードが語られることも一般的である、つまり複線的に物語が展開していく漫画に対して、一定の時間で作品が完結することを求められる舞台では、物語の骨子を十分に観客に伝えるために物語展開が単線的にならざるを得ないことを確認したうえで、そのような制約によって作品のテーマ自体も変更をせまられるという点を分析した。

研究の方法に示した（2）については、演じ手のアイデンティティや、演技を離れた部分で展開される俳優自身のプロモーション戦略との兼ね合いから、作品の中でジェンダーが可変的に表現されていても、それは再現されずに省略されてしまうという点について分析した。

以上により、翻案過程ではメディアの特性に合わせて作品の詳細部分は必然的に変更され、それによって作品の核となる部分を抽出した翻案が目指されるが、その過程が不可避的に作品の核自体を変更させるということを考察した。

【2021年度】

とくに「舞台という表現形式」がマンガの中でどのように描かれているのかに注目し、研究を進めた。初期の少女マンガに、演劇やバレエなど舞台芸術の要素を取り入れた作品例が多いことや、手塚治虫が映画的マンガ表現を作り出す際に、宝塚歌劇などの舞台表現に影響を受けた演劇的マンガ表現を検討していたことなどは、広く知られている。とはいえ、平面に描かれる静止画であるマンガに、実演される芸術である舞台の演出方法などがどのように応用されたのかについては、議論があまり蓄積されていないのが現状である。そこで、具体的な作品の分析を通して、どうやってマンガの中で舞台という表現形式が再現されているのかを考察することにした。

同時に、特定の「原作」を持たない翻案は何を翻案しているのか、という問題にも取り組んだ。劇団などを主題としたマンガの中では、舞台や劇場の雰囲気を読者に伝えるために、具体的な作品が特定されない場面が描かれることがある。そのような場合、マンガは翻案している「舞台の雰囲気」とは何な

のか、そしてどのような演出を通して、「舞台の雰囲気」を読者に読み取らせているのかも研究の問いとし、作品分析を実施した。

【2022年度】

とくに注目すべき作品として『DEATH NOTE』（大場つぐみ・小畑健、集英社刊）についての検討を進めた。当該作品は、2000 年代（一部、2020 年）に漫画・映画・テレビアニメが発表され、2010 年代にはテレビドラマおよびミュージカルへの翻案が行われた。とくにミュージカル版は、日韓で発表され、2023年にも韓国で演出を改たにした作品が発表される。2022年度は、漫画と2015・2017・2020年に日本で発表されたミュージカル版を比較し、登場人物の動機がどのように表現されているかを比較した。

漫画では、主人公が「デスノート」と呼ばれる道具を用いて殺人を繰り返すが、その動機は重層的なもの（主人公の正義感、自分自身への言い訳、他者へのアピール、行為の戦略）として描写されている。一方、ミュージカル版では、動機は「歪んだ正義感」として一本化されて語られる。翻案過程でこのような違いが生じた背景には、漫画とミュージカルそれぞれの特性がある。漫画は、言葉・絵・コマ構成が相互に影響を与えながら物語をつむぐメディアであるために、それぞれの表現要素が異なった意味を発信することができる。また、複数年かけて連載が継続するために、複雑な物語展開が可能である。これに対してミュージカルでは、数時間で物語を観客に伝える必要があることから、漫画のような重層的な意味生成が困難なのではないかということが分かった。

【2023年度】

最終年度は本研究課題の総括を行い、本研究の成果と残された研究課題を整理した。

まず、本研究を通して、マンガの舞台化が盛んにおこなわれた時期を次の三つに区分できるのではないかという仮説が得られた。[1]1920 年代～（萌芽期）、[2]1970 年代～（展開期）、[3]2000 年代～（発展期）である。このうち、とくに具体的な作品研究が可能であった発展期については、マンガから舞台への翻案過程について、社会学、マンガ研究、音楽学、文化興行学のアプローチから具体的な分析をおこなった結果の整理をおこなった。その成果のうちとくに重要なものは、最終報告書としてまとめた。最終報告書は、国会図書館に納本するとともに、各所属大学の機関リポジトリなどを活用して公開する（なお電子版は 2024 年6月に納本予定）。

報告書は、「現代日本を舞台とするミュージカル作品における音楽の「日本性」に関する考察: フランク・ワイルドホーン《デスノート》（2015）を参考に」「翻案による作品テーマの創出」「韓国におけるミュージカルの現況とマンガ原作ミュージカル『Death Note』」といった、同一作品を音楽学、マンガ研究、文化社会学の視点から多角的に分析した論考と、「マンガが演劇に翻案される際のメディア表現の分析」他の論考によって構成されている。

また、このように成果を整理して報告書にまとめる作業のなかで、(1) 萌芽期や展開期のマンガの舞台化については、どのような作品が誰の手によって制作され上演されたかといった基礎データが整理されていない、(2) 各時期がどのように接合されているかをめぐる議論の蓄積が不足している、という問題点が改めて浮上した。また、(3) 舞台表現を描いたマンガ作品の歴史がほぼまとめられていないという基礎的な問題が残されているままであることについても、今後検討すべきであることを確認できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 西原麻里	４．巻 50
２．論文標題 ジェンダーの問題意識を、2022年にアップデートしたい	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ビランジ	６．最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増田のぞみ	４．巻 2023年2月18日
２．論文標題 令和の宝塚歌劇（上）翻案作品に「らしさ」凝縮	５．発行年 2023年
３．雑誌名 毎日新聞（夕刊）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 秦美香子	４．巻 54
２．論文標題 漫画で表現される舞台	５．発行年 2022年
３．雑誌名 花園大学文学部研究紀要	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 増田のぞみ	４．巻 43
２．論文標題 公演評「友との記憶を胸に歩みを進める新たな花組へのエール」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宝塚イズム	６．最初と最後の頁 71-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 増田のぞみ	4．巻 44
2．論文標題 公演評「新たな時をともに刻もう――花組誕生百周年に咲き誇る花たちのきらめき」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 宝塚イズム	6．最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 秦　美香子	4．巻 18
2．論文標題 作品と文化規範――手塚治虫「どろろ」の舞台化を事例として	5．発行年 2020年
3．雑誌名 人間学研究	6．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西原麻里	4．巻 18
2．論文標題 マンガが演劇に翻案される際のメディア表現の分析――『トーマの心臓』における「内面」を題材に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 人間学研究	6．最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 秦美香子	4．巻 53
2．論文標題 マンガ作品と舞台作品の比較――『銀牙――流れ星　銀』を事例として	5．発行年 2021年
3．雑誌名 花園大学文学部研究紀要	6．最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 秦美香子	4．巻 13
2．論文標題 【研究ノート】児童文学作品の翻訳・翻案に見られる、文化規範の翻訳	5．発行年 2020年
3．雑誌名 花園大学日本文学会	6．最初と最後の頁 107-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 秦美香子
2．発表標題 翻案による作品テーマの創出 ―『デスノート』に注目して
3．学会等名 日本マンガ学会第21回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 山中千恵
2．発表標題 ウェブトゥーン『神と共に』のアダプテーションをめぐって--ミュージカル版と映画版における「平凡な人生」
3．学会等名 中部人間学会第22回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 秦美香子
2．発表標題 宝塚歌劇の翻案としての『かげきしょうじょ！！』――人物造形に注目した分析
3．学会等名 中部人間学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 秦美香子
２．発表標題 マンガ作品と舞台翻案の比較――『銀牙――流れ星　銀』を事例として
３．学会等名 2020年日本マンガ学会オンライン研究発表会
４．発表年 2020年

１．発表者名 秦美香子
２．発表標題 マンガ作品を舞台表現に翻案する――舞台出演者への聞き取り調査に基づく考察
３．学会等名 関西社会学会第71回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 秦美香子
２．発表標題 翻訳と翻案――transcreationという視点から
３．学会等名 中部人間学会第20回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 秦美香子・西原麻里・増田のぞみ・山中千恵
２．発表標題 マンガ－舞台間のアダプテーション―宝塚歌劇『ポーの一族』の事例から
３．学会等名 日本マンガ学会第19回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 西原麻里
２．発表標題 マンガ表現はいかに舞台化されるか――『トーマの心臓』のアダプテーション
３．学会等名 中部人間学会第19回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 秦美香子
２．発表標題 マンガによる時間表現――舞台へのアダプテーションを例に
３．学会等名 中部人間学会第19回研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	西原　麻里 (Nishihara Mari) (20623573)	跡見学園女子大学・文学部・准教授 (32401)	
研究分担者	増田　のぞみ (Masuda Nozomi) (80449553)	甲南女子大学・文学部・教授 (34507)	
研究分担者	山中　千恵 (Yamanaka Chie) (90397779)	京都産業大学・現代社会学部・教授 (34304)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関